

三十年前の島田沼南

内田魯庵

青空文庫

一

島田 沼南しまだしやうなん

沼南は大政治家として葬られた。清廉潔白百年まれ稀に見る君子人として世を挙げ
て哀悼された。棺を蓋おほうて定まる批評は燦爛さんらんたる勲章よりもヨリ以上に沼南の一生の政
治的功績を顕揚するに足るものがあつた。

沼南には最近十四、五年間会つた事がない。それ以前とて会えば寒暄かんけんを叙する位の面
識で、私邸を訪問したのも二、三度しかなかった。シカモその二、三度も、待たされるの
がイツモ三十分以上で、漸ようやく対座して十分かソコラで用談を済ますと直ぐ定きまつて、「ドウ
ゾ復またたお閑の時御ユツクリとお遊びにいらして下さい」と後日の再訪を求めて打切られ
るから、勢い即時に暇いとま乞こいせざるを得なくなった。随したがつて会えば万更路人まんざろのように扱
われもしなかつたが、親しく口を利きいた正味の時間は前後合して二、三十分ぐらいなもん
だつたろう。

が、沼南の「復たドウゾ御ユツクリ」で巧みに撃退されたのは我々通り一遍の面識者ば
かりじゃなかつた。沼南と仕事を侶ともにした提携者や門下生的關係ある昵近者じつきんさえが「復

たユツクリ来給え」で碌々ろくろく用談も済まない中に撃退うちされてブツクサいうのは珍らしくなかつた。

尤も沼南は極めて多忙で、地方の有志者などが頻ひんぱん繁に出入していたから、我々閑人ひまじんももつとユツクリ坐すわり込まれるのは迷惑だったに違いない。かつ天下国家の大問題で充満する頭の中には我々閑人のノンキな空談を容いれる余地はなかつたろうが、応酬に巧みな政客の常で誰にでも共鳴するかのよう調子を合あわせるから、イイ氣になつて知己を得たツモりで愚談を聴いてもらおうとすると、忽たちまち巧みに受流されて「復たおヒマの時に御ユツクリ」で撃退されてしまう。

由来我々筆舌の徒ほど始末の悪いものはない。談ずる処は多くは実務に縁の遠い無用の空想であつて、シカモ発言したらびび々として尽きないから対手あいてになつていたら際限がない。沼南のような多忙な政治家が日に接せつしよう踵すべする地方の有志家を撃退すると同じコツで我々閑人ひまじんを遇するは決して無理はない。ブツクサいうものが誤つておる。

が、沼南の応対は普通の社交家の上ツ滑うわすべりのした如才なさと違つて如何にも真率に打解いけて対手を育服えがさした。いつもニコニコ笑顔えがを作つて僅わずか二、三回の面識者をさえ百年の友であるかのように遇するから大抵なものはコロリと参つて知遇を得たかのように感激す

る。政治家や実業家には得てこういう人を外^そらさない共通の如才^そなさがあるものだが、世事に馴^なれない青年や先輩の恩顧に渴する不遇者は感激して忽ち腹心の門下や昵近の知友となつたツモリに独^{ひと}りで定^きめてしまつて同情や好意や推^{すい}輓^{ばん}や幹^{かん}旋^{せん}を求めに行くと案外素^そ気なく待遇^{あし}われ、合力無心を乞う苦学生^{つげ}の如くに撃退されるので、昨の感激が消滅して幻滅を感じ、敵意を持たないまでも不満を抱き反感を持つようになる。沼南ばかりじゃない。

二

沼南は終始一貫清廉を立^{たて}通^{とお}した。少くも利権割取を政治家の余得として一進一退^{すべ}を総^{すべ}て金に換えて怪^{あや}まない今の政界にあつては沼南は実に鷄^{けい}群^{ぐん}の一^い鶴^{かく}であつた。

が、清廉を看板にし売物にする結果が貧乏をミエにする奇妙な虚飾があつた。無論、沼南は金持ではなかつた。が、その社会的位置に相應する堂々たる生活をしていたので、濁富でないまでも清貧を任ずるには余りブルジョア過ぎていた。それにもかかわらず、何かというとも必要もないのに貧乏を揮^{ふり}廻^{まわ}していた。

沼南が今の邸宅を新築した頃、偶然訪問して「大層立派な御普請が出来ました、」と挨拶^あ

いさつ
拶すると、沼南は苦笑いして、「この家も建築中から抵当に入ってるんです」といった。何の必要もないのにそういう世帯の繰廻しを誰にでも吹聴するのが沼南の一癖であった。その後沼南昵近のものに訊くと、なるほど、抵当に入ってるのはホントウだが、これを抵当に取った債権者というは岳父であつたそうだ。

これも或る時、ドウいう咄の連続であつたか忘れたが、例の通り清貧咄をして「黒くとも米の飯を食し、綿布でも綿の入った着物を着ていれば僕はそれで満足している」と得々としていった。沼南が平生綿服を着ているかドウかは知らぬが、その時の沼南はリユウとしたお召か何かでゾロツとしていたのだから挨拶に窮した。

その後、沼南昵近の或る男に会つた時、その話をして、「何だつてアンナに貧乏ぶるんだろう、」というと、

「アレは沼南の癖だよ、」といった。「ツイこの頃も社（毎日新聞社）で沼南が、何かの話のついでに僕はマダ抱え俵を置いた事がない、イツデモ辻俵で用を足すというンのだ。沼南の金紋護謄輪の抱え俵が社の前にチャンと待つてるんだからイイじゃないか。社の者が沼南の俵を知らないとはマサカに思つてもいまいが、他の者が貧乏咄をすると自分も釣られて負けない気になつてウツカリいつてしまふんだネ。お目出たい咄サ。こんな処はマ

ア低能だネ。」

沼南の清貧咄は強ち貧乏を銜うためでもまた借金を申込まれる防禦線を張るためでもなかつたが、場合に由ると聴者に悪感を抱かせた。その頃毎日新聞社に籍を置いたG・Yという男が或る時、来て話した。「僕は社の会計から煙草錢ぐらい融通する事はあるが、個人としての沼南には一錢だつて借りた覚えがない。ところがこの頃退引ならぬ事情があつて沼南に相談すると、君の事情には同情するが金があればいいがネ、と袂から臺口を出して逆さに振つて見せて、「ない、同情するには同情するが生憎僕にも金がない」という、こういう挨拶だ。貸す氣がないなら貸さんでもいい、無理に借りようとはいわない。何も同情呼ばわりして逆さに臺口を振つて見せなくても宜からう、」と、ポンプン怒つて沼南を罵倒した事があつた。

その頃の新聞社はドコも貧乏していた。とりわけ毎日新聞社は最も逼迫して社員の給料が極めて少かつた。妻子を抱えているものは勿論だが、独身者すらも糊口がし兼ねて社長の沼南に増給を哀願すると、「僕だつて社からは十五円しか貰わないよ」というのが定つた挨拶であつた。増給は魯か、ドンナ苦しい事情を打明けられても逆さに臺口を振つて見せるだけだ。「十五円であの生活が出来るかい。十五円はウソじやアあるまいが、沼

南の収入は社の月給ばかりじやなからう。コッチは社から貰う外にドコからも金の入る道はないンだぜ、」と、沼南に逆さに墓口を振って見せられた連中は沼南の口先きだけの同情をブツクサいつていた。

三

それでも当時の毎日新聞社にはマダ嚶鳴社おうめいしゃ以来の沼間ぬまの気風が残っていたから、当時の国士的記者気質かたぎから月給なぞは問題としないで天下の木鐸ぼくたくの天職たのしを楽しんでいた。が、新たに入社するものはこの伝統の社風に同感するものでも、また必ずしも沼南の人物に推服するものばかりでもなかったから、暫らくすると沼南の節度あきたに慊あきららないで社員は絶えず代謝して、解体前の数年間はシツキりなしにガタビシしていた。

就中なかんずく、社員が度々不平を鳴らし、かつ実際に困らせられたのは沼南の編輯方針が常にグラグラして朝令暮改あさけふかい少しも一定しない事だった。例えば甲の社員の提言を容れて直ぐ実行してくれと命じたものを乙の社員の意見でクルリと翻えして肝腎かんじんの提言者に通告もしないでやめてしまう。そんな事とは知らないから前に命ぜられた社員は着々進行して率い

ざ実現しようとなると、「アレはやめにした、」とケロリと冷ました顔をしている。自分ばかりが呆氣あつけに取られるだけなら我慢もなるが、社外の人に手数を掛けたり多少の骨折ほねおりをさせたりした事をお関かまいなしに破壊はきされてしまつては、中間に立つ社員は板挟いたばさみになつて窮きつしてしまふ。あるいはまた、同じ仕事を甲にも乙にも丙にも一人々々に「君が適任だから骨を折つてくれ」と命ずる。自分だけが命ぜられたツモりで各々めいめい一生懸命になつて骨を折つてると、イツカ互に同士どうしうち討うちしている事が解るから誰も皆厭氣いやきがさして手を引いてしまふ。手を引くばかりでなく反感を持つようになる。沼南統率下の毎日新聞社の末期が情氣満々として一人も本氣に働くものがなかったのはこれがためであつた。

松隈内閣だか隈板内閣だかの組閣あたまに方あたつて沼南が入閣するといふ風説が立つた時、毎日新聞社にかつて在籍して猫の目のようにクルクル変る沼南の朝令暮改に散三さんざツ原苦げんくしまされた或る男は曰いわく、「沼南の大臣になるなら俺おれが第一番に反対運動する、国家の政治が沼南のお天気模様で毎日グラグラ変られて堪たまるもんか、」と。

毎日新聞社が他へ譲り渡された時、世間では十日も前から噂うわさがあつたが、社員は燈台とうだいも暗くらしで、沼南の腹心はあるいは知つていたかも知らぬが、平ひらの社員は受渡しうけ渡しの済んだ当日になつても知らなかつた。中には薄々うすうす感かんづいて沼南の口占くちうらを引いて見たものもあ

つたが、その日になつても何とも沙汰さたがないので、一日社務に服して家へ帰ると、留守宅に社は解散したから明日から出社に及ばないという葉書が届いているんだから呆氣あつけに取られてしまった。

いやしくも沼南は信誼しんぎを重んずる天下の士である。毎日新聞社は南風競きそわずして城を明渡さなくてはならなくなつても安い月給を甘んじて悪銭苦闘を続けて来た社員に一言の挨拶もなく解散するというは嚶鳴社以来の伝統の遺風からいっても許しがたい事だし、自分の物だからといつて多年辛苦を侶ともにした社員をスッポかして、タダの奉公人でも追出すような了簡りようけんで葉書一枚で解職を通知したぎりで冷すましているというは天下の国士を任ずる沼南にあるまじき不信であるといふので、葉書一枚で馘かくしゅ首された社員は皆カンカンになつて結束して沼南に迫つた。その結果が沼南のイツモ逆さに振つて見せる臺口から社を売つた身代金みのしろきんの幾分を吐出はきだして目出たく無事に落着いたそうさ。そうかと思つと一方には、代がわりした『毎日新聞』の翌々日に載る沼南署名の訣けつべつ別の辞のゲラ刷ずりを封入した自筆の手紙を友人に配っている。何人に配つたか知らぬが、僅わずかに数回の面識しかない浅い交際の私の許もとへまで遣よこしたのを見るとかなり多数の知人に配つたらしいが、新聞社を他へ譲渡ゆずりわたすの止むを得ない事情を縷々るると訴えたかなり長い手紙を印刷もせず代筆でもなく

一々自筆で認めて何十通（あるいはそれ以上）も配つたのは大抵じやなかつたらう。平生の知己に対して進退行蔵を公明にする態度は間然する処なく、我々後進は余り鄭重過ぎる通告に痛み入ったが、近い社員の解職是一片の葉書の通告で済まし、遠いタダの知人には頗る慇懃な自筆の長手紙を配るという処に沼南の政治家的面目が仄見える心地がする。

沼南の五十年の政治家生活が終に台閣の椅子を酬いられなかつたのは沼南の志が世俗の権勢でなかつたからばかりではない。アレだけの長い閱歷と、相当の識見を擁しながら次第に政友と離れて孤立し、頼みになる腹心も門下生もなく、末路寂寞として僅に廓清会長として最後の幕を閉じたのは啻に清廉や狷介が累いしたばかりでもなかつたらう。

四

沼南は廃娼を最後の使命として闘った。が、若い時には相應に折花攀柳の風流に遊んだものだ。その時代の沼南の消息は易簣当時多くの新聞に伝えられた。十年前だつた、塚原靖島田三郎合訳と署した代数学だか幾何学だかを偶然或る古本屋で見附け

た。余り畑はたけ違いの著述であるのを不思議に思つて、それから間もなく塚原老人に会つた時に訊きくと、「大変なものを見附けられた。アレはネ……」と渋柿園老人は例の磊らい落らくな調子で、「島田の奴が馬を引張ひっぱつて来たので、仕方がないから有合ありあいのものを典じて始末をつけたが、その穴埋あなうめをしなけりやならん。そこで島田が或る本屋を口説くどいたところが、数学の本を書いてくれるなら金を出そうというので、それから島田がドコからか原書を借出して来て、二人して一週間ばかりで書上げたのがアノ本サ。早速金に換ふえて懐ふところが温あつまったので、サア繰出せと二人して大豪遊を極めたところが、島田の奴はイツマデもブン流して帰ろうといわんもんだから、とうとう遣い果して復た馬を伴つれて戻るといわけサ。その時分の島田はソリヤアでれでして尻しりが腐くつてしまうんだからカラ始末に行かなかつた」と昔を憶おも出して塚原老人はカラカラと笑つた。この頃の或る新聞に、沼南が流連なしみして馴染なじみの女が病氣で臥ねている枕頭ちんとうにイツマデも附添つつて手厚く看護したという逸事えきじが載のっているが、沼南は心しん中の仕損しそいまでした遊蕩児ゆうとうじであつた。が、それほど情こまが濃こまやかだつたので、同じ遊蕩児でも東家西家と花を摘んで転々する浮薄漢ではなかつたようだ。

沼南は本姓鈴木で、島田家の養子であつた。先夫人は養家の家いえ附娘つきだともいうし養女

だともいうが、ドチラにしても若い沼南が島田家に寄食していた時、懷おもわれて縁組した恋婿であつたそうだ。沼南が大限おおくま参議と進退を侶ともにし、今の次官よりも重く見られた文部権大書記官の栄位を弊履の如く一蹴いっしゅうして野に下り、矢野文雄や小野梓と並んで改進黨の三領袖りょうしゅうとして声望隆々とした頃の先夫人は才貌双絶の艷名えんめいを鳴らしたもんだつた。

その頃私は番町の島田邸近く住すまつていたので、度々島田夫人と途中で行逢ゆきあつた。今なら女優というような眩まぶしい粉黛ふんたいを凝らした島田夫人の美装は行人の眼を集中し、番町女王としての艷名は隠れなかつた。良人沼南と同伴でない時はイツデモ小間使こまつかいを同伴ともにつれていたが、その頃流行した前髪まえがみを切つて前額ひたいに垂たらした束髪そくはつで、嬌態しなを作つて桃色ももいろの小さいハンケチを揮ふり揮り香水の香においを四辺あたりに薫くんじていた。知らないものは芸者でもなし、娘さんでもなし、官員さんの奥様らしくもなしと眼みはを睜みはつて美貌と美装に看惚みとれたもんだ。その時分はマダ今ほど夫婦連れ立つて歩く習慣が流行はやらなかつたが、沼南はこの艷色した滴したたる夫人を出来るだけ極彩色させて、近所の寄席よせへ連れてつたり縁日を冷かしたりした。孔雀じやくのような夫人のこの盛粧はドコへ行つても目に着くので沼南の顔も自然に知られ、沼南夫人と解つて益々ますます夫人の艷名が騒がれた。

九段の坂下の近角常觀くくだん ちかすみじょうかんの説教所は本とは藤本というこの辺での落語席であつた。或る晩、誰だかの落語を聴きに行くと、背後で割れるような笑い声がした。ドコの百姓が下らぬ低級の落語に見つともない大声を出して笑うのかと、顧ふりかへ眄みつて見ると諸方の演説会で見覚えの島田沼南であつた。例の通りに白壁しろかべのように塗り立てた夫人とクツつき合つて、傍若無人に大きな口を開いてノベツに笑つていたが、その間夫人は沼南の肩を叩たたいて膝ひざを揺ゆつたりして不行儀を極めていたので、衆人の視線は自然と沼南夫妻に集中して高座こうざよりは沼南夫妻のイチヤツキの方に氣を取られた。沼南の傍若無人の高笑いや夫人のヒツヒツと攪くすぐられるような笑いが余り耳みみ触さわりになるので、「百姓、静かにしろ」と罵ののし声を浴びせ掛けられた。

数年前物故ぶつこした細川風谷の親父の統計院幹事の細川広世が死んだ時、九段の坂上で偶然その葬列に邂逅であひわした。その頃はマダ合乗あいのりぐるま俥こしというものがあつたが、沼南は夫人と共に一つ俥に同乗して葬列に加わつていた。一体合乗俥あいのりぐるまというはその頃の川柳や都々逸どどいつの無二の材料となつたもので、狭い俥に両性がピツタリ粘着くっつき合つて一つ膝掛ひざかけに纏くまつた容子は余り見つともイイものではなかつた。搗かてて加えて沼南夫人の極彩色にお化粧した顔はお葬い向きでなかつた。その上に間断なくニタニタ笑いながら沼南と喃なん々私語して行く

てい 体たらくは柩ひつぎを見送るものを 輦ひん 蹙しゆく せしめずには措おかなかつた。政界の名士沼南とも知らない行人の中には目に余つて、あるいは岡焼おかやき半分に無礼な罵声を浴びせ掛けるものもあつた。

その頃は既に鹿鳴館ろくめいかんの欧化時代を過ぎていたが、欧化の余波は当時の新らしい女の運動を惹起じやつきした。沼南は当時の政界の新人の領袖りやうしゆうとして名声せきじん甚し、キリスト教界の名士としてもまた 儕輩せいはいに推おされていたゆえ、主としてキリスト教側から起された目覚めめざめた女の運動には沼南夫人も加わつて、夫君を背景としての勢力はオサオサ婦人界を圧していた。

丁度巖いわもと 本善治もとよしはるの明治女学校が創立された時代で、教会の奥に隠れたキリスト教婦人が街頭に出でて活動し初めた。九十の老齢で今なお病を養いつつ女の頭領として仰がれる矢島楯子やじまかじこ刀自とうじを初め今は疾とつくに鬼籍に入つた木村鎧子きむらゐさき夫人や中島湘烟なかじましようえん夫人は皆當時に崛起くつきした。国木田独歩くにきだどつぽを恋に泣かせ、有島武郎ありしまたけおの小説に描かれた佐々木のぶ子の母の豊と寿夫人はその頃のチャキチャキであつた。沼南夫人はまた実にその頃の若い新らしい側を代表する花形であつた。

今日の女の運動は社交の一つであつて、貴婦人階級は勿論だが、中産以下、プロ階級の

女の集まりでもとにかく着物やおつくりの競争場になりがちであるが、その頃のキリスト教婦人は今の普通の婦人は勿論、教会婦人と比べても数段ビューリタニツクであつて、若い婦人の集りでも喪に包まれたようで色彩に乏しかった。その中で沼南夫人は百舌もずや鴉からすの中のインコのように美しく飾り立てて脂粉と色彩の空気を漂わしていた。

この五色で満身を飾り立つたインコ夫人が後に沼南の外遊不在中、沼南の名誉に泥を塗つたのは当時の新聞の三面種ともなつたので誰も知つてゐる。今日これを繰返しても決して沼南の徳を累する事はあるまい。徳を累するどころか、この家庭の破綻はたんを処理した沼南の善後策は恐らく沼南の一生を通ずる美德の最高発現であつたろう。

五

沼南のインコ夫人の極彩色は番町界限や基キリスト督教界で誰知らぬものはなかつた。羽子板はこいたの押絵が抜け出したようで余り目に立ち過ぎたので、鈍色にぶいろを女徳の看板とする教徒の間には響くものもあつた。欧化気分がマダ残つていたとはいへ、沼南がこの極彩色の夫と衆人環視の中でさえも綢繆ちゆうびゆう纏綿てんめんするのを苦笑して窃ひそかに沼南の名誉のため危あやぶむ

ものもあつた。果然、沼南が外遊の途に上つてマダ半年と経たない中に余り面白くない噂がポツポツ聞えて来た。アアいう人目ひとめに着く粧よそおいの婦人に対してはとにかくにあらぬ評判をしたがるもんだから、我々は沼南夫人に輦ひた轡ましながらも余りに耳を傾けなかつた。が、沼南の帰朝が近くなるに従つて次第に風評が露骨になつて、二、三の新聞の三面に臭わされるようになった。

その頃沼南の玄関にYという書生がいた。文学志望で夙はくから私の家に入いり出してゐた。沼南が外遊してからは書生の雑用が閑ひまになつたからといつて、殊にシゲシゲと遊びに來た。写字をしたり口授を筆記したりして私の仕事の手伝いをしてゐた。面胞にきびだらけの小汚こぎたない醜男ぶおとこで、口は重く氣は利かず、文学志望だけに能書といふほどではないが筆札だけは上じ手ようずであつたが、その外には才も働はたらきもない朴念人ぼくねんじんであつた。

沼南が帰朝してから間もなくだつた。Yは私の仕事の手伝いをしに大抵毎日、朝から來ては晩まで殆ほとんど一日を私の家で過すごしたが、或る時、「ちよつと故郷こくにへ帰りますから今日ぎり暫らくお暇いまだを戴いたきたい」といつた。

余り突然だつたので、故郷こくにに急な用事でも出來たかと訊きくと、脚氣かっけだといつた。ソナけぶり氣振はそれまでなかつたのだから嘘うそとは思つたが、その日ぎりけぶりで來なくなつてしまつた。

それから二、三日過ぎて、偶然沼南夫妻の在籍する教会の牧師のU氏を尋ねると、U氏はちよつとした咄^{はなし}の途切れに、「Yはこの頃君のどこへ行くかい？」といった。

「二、三日前に来て近々故郷^{くに}へ帰るといつてました。」

「その他^{ほか}に一身上の咄は何もしなかったかい？」

「イヤ、何にも。」

「困ったよ、」U氏は首を掉^ふつて一^{ひと}と言^{こと}いつたぎり顔を顰^{しか}めて固^{くちびる}く唇を結んでしまった。

「Yがドウかしましたか？」

「困ったよ、」と、U氏は両手で頭を抱^{かか}えて首を掉り掉り苦しそうに髪の毛を搔^{むし}き揉^もった。

「君はYから何も聞かなかったかい？」

「何にも聞きません。」

「こんな弱った事はない、」と、U氏は復^{また}た暫らく黙してしまった。やがて、「君は島田のワイフの咄^どを何処^{どこ}かで聞いたろう？」

「どんな話をです？」と、氏の問^とが能^よく吞^{のみ}込めないので訊き返したが、その時偶^ふつと胸に浮んだのは沼南外遊中からの夫人の芳^{かん}ばしからぬ噂であった。ツイその数日前の或る新聞にも、「開国始末」で冤^{えん}を雪^{そそ}がれた井伊直弼^{いひなおすけ}の亡霊がお礼心に沼南夫人の孤^こ閨^{けい}の無^{ぶり}聊^{よう}を

慰めに夜な夜な通うというようなくす撥ぐった記事が載っていた。今なら女優をおも想わしめるジャラクラした沼南夫人が長い留守中の孤独に堪えられなかったというは、さもありそんな気もするが、マサカに世間で評判するようなソナ不品行ふしだらもあるまいと、U氏の島田のワイフの咄というのが何とも計りかねてU氏の口の開くのを待っていると、

「君も薄々知ってるだろうが、島田のワイフが飛んでもない不品行をやってネ……」

私はハツとした。予期した事が実現されたようでもあるし、自分の疑心で迎えてU氏の言葉を間違えたようにも思つて、「ホントウですか、」と反問すると、

「ホントウとも、ホントウとも、」とU氏は早口にうなず點頭いて、「ホントウだから困つてしまつた。」

U氏が最初からの口吻くちぶりではYがこの事件に関係があるらしいので、Yが夫人の道に外はずれた恋の取持ちでもした乎か、あるいは逢あひ曳びきの使いか手紙の取次でもしたかと早合点はやがてんして、

「それじゃアYが夫人の逢曳のお使いでもしたんですか?」というと、

「そんなほうじよざい幫助罪ならマダ軽いが、不品行の対手あいての本人なんだ。」

「えッ?」と私はまるで狐に魅つままれたような気がした。

沼南夫人のジャラクラした姿態や極彩色の化粧を一度でも見た人は貞操が足駄を穿いて玉乗たまのりをするよりも危あぶなツかしいのを誰でも感ずるだろう。が、世界の美人を一人で背負おつて立つたツモリの美貌自慢の夫人が扱よりに扱よつて面胞にきびだらけの不男ぶおとこのYを相手に恋の綱渡りをしようとは誰が想像しよう。孔雀くじやくが豚を道連れにするエソップにでもありそうな図おもが憶いだ出された。

「あの奥さんがYと？」と私は何度も何度も一つ事を繰返して「そうだよ、ホントウだよ」とU氏に何度もいわれても自分の耳を疑わずにはいられなかった。

六

駿馬しゅんめ痴漢を乗せて走るといふが、それにしてもアノ美貌を誇る孔雀夫人が扱よりに扱よつて面胞にきび面の不男を相手にするとは余り物好き過ぎる。尤も一と頃ロンドン倫敦の社交夫人間にカメレオンを鍾しょう愛あいする流行があつたといふが、カメレオンの名代みようだいならYにも勤まる。

そういえばYの衣服みなりが近来著るしく贅ぜい沢たくになつて来た。新裁下したておろしのセルの単衣ひとえに大

巾縮緬おはばちりめんの兵児帯へこおびをグルグル巻きつけたこの頃のYの服装は玄関番の書生としては分に過ぎていた。奥さんから貰もらったと自慢そうに見せた繻ぬいつぶしの紙入かみいれも書生にくれる品じゃない。疑えば疑われる事もまるきりないじやなかったが、あのモズモズした無愛想な男、シカモ女に縁のなさそうな薄汚うすぎたない面つらをした男が沼南夫人の若い燕つばめになろうとは夢にも思わなかったから、夫人の芳ばしくない噂を薄々小耳こみみに入れてもYなどはテンから問題としなかった。

「女が悪いんだ。女の方から持掛けたんだ、」とU氏は波面しゅうめんを作つて苦笑にがにがしい微笑を唇辺くちもとに寄せつつ、「あの女は先天的に墮落の要素を持つてる。僕は裁判をしてこつちが羞恥しゅうちを感じて赤面したが、女はシャアシャアしたもので、平気でベラベラ白状した。職業的墮落婦人よりは一層厚顔だ。口の先では済まない事をした、申訳がありませんといったが、腹の底では何を思つてるか知れたもんじやない。良心がまるで曇つてる。」

「Yも平気でしたか？」

「イヤ、Yは小さくなつて悄しおれ返つていた。アレは誘惑されたんだ、オモチャにされたんだ。」

と、U氏はYの悔悛かいしゅんに多少の同情を寄せていたが、それには違いなくとも主人なり恩

師なりの眼を掠めてその最愛の夫人の道ならぬ遊戯のオモチャになったYの破廉恥を私は憤らずにはいられなかった。Yは私の門生でも何でもなかった。が、日夕親しく出入していただけに私までが馬鹿にされたような不快を感じた。

「Yはマダ人間が出来ておらんから直ぐ誘惑される。チンコロのようにオモチャにされてんで罪を犯す了りようけん簡かんがあつたんじやない。島田の許へ連れてって詫あやまらせたが、オイオイ声を揚げて泣き出した。」

U氏がコンナ事でYを免ゆるすような口吻くちぶりがあるのが私には齒痒はがゆかった。Yは果してU氏の思うように腹の底から悔く懊いめたであらう乎。この騒さわぎが持もち上あがつてる最中でもYは平気な顔をして私の家へ来て仕事の手伝いをしていた。沼南と私とは親しい知り合いでなかったにしろ、沼南夫妻の属するU氏の教会と私とは何の交渉がなかったにしろ、良心が働いたなら神の名を以てする罪の裁きを受ける日にノメノメ恥を包んで私の前へは出て来られないはずであるのを、サモ天地に恥じない公明正大の人であるかのような平気な顔をして私の前に現れた。これが神を畏おそれ罪を恥じて悔懊くわいめた人であらう乎。

U氏もYの罪を免しつてもその態度にはマダ慊あきたらないものがあつたのであらう。「君には何にも話さなかったかい？ 変つた素振そふりは見えなかったかい？」といった。

「そんな不名誉な話は無論する氣遣いはありませんが、シカシ妙だと思いましたよ、二、三日前に来た時急に国へ歸るつてましたから。」

「それは君、島田が歸らせるんだよ。島田には実に感服したよ。Yがオイオイ声を出して泣いて詫まった時にダネ。人間てものは誰でも誤つて邪路に踏迷う事があるが、心から悔悛めれば罪は奇麗に拭い去られると懇々説諭して、俺はお前に顔へ泥を塗られたからつて一端の過失のために前途にドンナ光明が待つてるかも解らないお前の一生を葬つてしまいたくない。なお更これから先きも手許に置いて面倒を見てやりたいが、それでは世間が承知しない。俺は決してお前を憎むのではないが暫らく余焰の冷めるまで故郷へ歸つて謹慎していてもraitaitoといつて、旅費その他の纏まった手当をくれた。その外に、修養のための書籍を二、三十冊わざわざ自分で買つて来てYの退先きへ届けてくれたそうだ。普通の常識では豪いか馬鹿かちよつと判断が出来ないが、左に右か島田は普通の人間の出来ない事をするよ——」

「それにはYも心から感謝して、その話を僕にした時ポロポロ涙を落して島田の恩を一生忘れないと泣いていた、」とU氏は暫らくしてから再び言葉を続け、「が、Yはマダ人間が出来ておらんから、恩に感ずる事も早いが恩を忘れる事も早い。君ももしYに会ったら

能く訓誡くんかいしてやってくれ給え。二度と再び島田に裏切るような不品行をしたなら、最もう世の中へ出て来られない。一生の廢すたれ者になつてしまふ。」

七

その頃私はマダ沼南と交際がなかつた。沼南の味も率そつ気もない実みなし汁じのような政治論には余り感服しなかつた上に、其處そこ此處ここで見掛けた夫人の顰蹙びたいすべき娼婦的媚態びたいが妨げをして、沼南に対してもまた余りイイ感じを持たないで、敬意を払う氣になれなかつた。

が、この不しだらな夫人のために泥を塗られても少しも平時の沈着うしなを喪うしなわなないで穩便おんべんに済まし、恩を仇あだで報ゆるに等しいYの不埒ふらちをさえも寛容して、諄じゆん々じゆんと訓誡くんかいした上に帰国の旅費まで恵み、あまつさえ自分に罪を犯した不義者を心から悔悛くゐあらためさせるための修養書を買つて与えたという沼南の大雅量おほやうりやうは普通人には真似まねても出来ない襟度きんどだと心から嘆服した。

「全く君子だ。古聖賢に恥じない徳人だ、」とそれまで沼南に対して抱いた誤解を一掃して、世間尋常政治家には容易ひつに匹ひつを求めがたい沼南の人格を深く感嘆した。

それにしてもYを心から悔悛めさせて、切めては世間並の真人間にしなければ沼南の高誼こうぎに対して済まぬから、年長者の義務としても門生でも何でもなくても日頃親しく出入する由縁ゆかりから十分訓誡して目を覚まさせてやろうと思ひ、一つはYを四角四面の謹嚴一方の青年と信じ切らないまでも恩人の顔に泥を塗る不義な人間とも思わなかったのが裏切られたイマイマしさから思うさま油を搾しぼつてやろうとYの来るのを待構まちかまえていた。が、二、三日経つても何の沙汰もないので、葉書を出して呼寄せたが、返事も来なければ終ついに顔も見せなかった。

二ヶ月ほどして国元から手紙を遣よこしたが、紋切形の無沙汰見舞であつた。半歳ほどして上京したが、その時もいずれ参上するという手紙を遣しただけでやはり顔を見せなかった。U氏から後に聞くと、U氏が私にYの話をした翌あぐの日に、帰国の前にモ一度私の許へ行けといったそうで、YはU氏が私に秘密を話したのを悟つて、キマリが悪くて来られなかったらしい。

Yはその後も度々故郷へ行つたり上京したりしたが、傷持つ足の自おのずと闕しきいが高くなつて、いつも手紙をよこすだけでそれぎり私の家へは寄り附かなくなつた。が、手紙で知らして来た容子よに由ると、その後も続いて沼南の世話になつていたらしく、中国辺の新聞記者と

なつたのも沼南の口入なら、最後に脚氣か何かの病気でドコかの病院に入院して終に死んでしまつた病院費用から死後の始末まで万端皆沼南が世話をしてやつたのだそうだ。

私が沼南と心易くなつたはその後であつた。Yが私の家へ出入してゐたのを沼南はよく知つていたが、私も沼南もYの名は一度でも噂にも出さなかつた。

沼南の先夫人のもしだらは当時二、三の新聞の三面を賑わしたから誰も知つてゐる。が、不義の相手の忘恩者を赦した沼南の大雅量は直接事件に交渉したもの外は余り知らない。使用人同様の玄関番の書生の身分で主人なり恩師なりの眼を盗んでその名誉に泥を塗るいおうようない忘恩の非行者を当の被害者として啻に寛容するばかりでなく、若氣の一端の過失のために終生を埋もらせたくない訓誡もし、生活の道まで心配して死ぬまで面倒を見てやつたというは世間に余り例を聞かない何という美談であらう。中には沼南が顔に泥を塗られた見にくさを箔でゴマカそうとするためのお化粧的偽善だというものもあるが、偽善でも何でも忘恩の非行者に対してこういう寛容な襟度を示したものは滅多にない。

沼南にはその後段々近接し、沼南門下のものからも度々噂を聞いて、Yに対する沼南の情誼に感奮した最初の推服を次第に減じたが、沼南の百の欠点を知つても自分の顔へ泥を塗つた門生の罪過を憎む代りに憐んで生涯面倒を見てやつた沼南の美德に対する感嘆は毫

も減ずるものではない。が、有^{ありてい}体にいうと沼南は度量海の如き大人格でも、清濁併^{あわ}せ呑む大腹中でもない。それよりはむしろ小惡微罪に触れるさえ忍び得られないで独りを潔^{いさぎよ}うする潔癖家であつた。濁流の渦卷^{うずま}く政界から次第に孤立して終にピューリタニツクの使命に潜^{かく}れるようになったは畢^{ひつぎよう}竟この潔癖のためであつた。が、ドウしてYに対してのみ寛大であつたろう。U氏は「沼南は不可解だ、神乎^か愚人乎」とその後しばしば私に話したが、私にも実はマダ謎^{なぞ}である。

沼南が議政壇に最後の光焰^{こうえん}を放つたのはシーメンス事件を弾劾^{だんがい}した大演説であつた。沼南の直^{ちよくせつ}截痛烈な長広舌はこの種の弾劾演説に掛けては近代政界の第一人者であつた。不義を憎む事蛇蝎^{だかつ}よりも甚^{はなは}だしく、惡政暴吏に対しては挺身搏^{はくとう}闘して滅ぼさざれば止まなかつた沼南は孤高清節を全うした一代の潔士でもありまた闘士でもあつた。が、沼南の清節は縋^{うんぼうへいこ}袍弊袴で怒号した田中^{たなか}正造^{しょうぞう}の操守と違つてかなり有福な贅沢な清貧であつた。沼南社長時代の毎日新聞社員は貧乏が通り相場である新聞記者中でも殊^{めき}に抽^ぬんで貧乏であつた。毎月の月給が晦日^{みそか}の晩になつても集金人が金を持って帰るまでは支払へなくて、九時過ぎまでも社員が待たされた事が珍らしくなかつた。随^{したが}つて社員は月末の米屋酒屋の勘定どころか煙草錢にもしばしば差支^{さしつか}えた。が、社長沼南は位置相当の門戸を

構える必要があつたとはいへ、堂々たる生活をしながら社員が急を訴えても空々しい貧乏咄をしてテンから相談對手にならなかつた。

沼南はまた晩年を風紀の廓清に捧げて東奔西走廃娼禁酒を侃々するに寧日なかつた。が、壮年の沼南は廃娼よりはむしろ娼で艶名隠れもなかつた。が、その頃は紅倚翠を風流として道德上の問題としなかつた。忠孝の結晶として神に祀られる乃木將軍さえ若い頃には盛んに柳暗花明の巷に馬を繋いだ事があるので、若い沼南が流連荒亡した半面の消息を剔抉しても毫も沼南の徳を傷つける事はないだろう。沼南はウソが嫌いであつた。「私はウソをいつた事がない」と沼南自身の口ずから聞いたのは数回に留まらないう。瑜瑕並び覆わざる赤裸々の沼南のありのままを正直に語るのは、沼南を唐偏木のピーリタンとして偶像扱いするよりも苔下の沼南は微笑を含んでかえつて満足するであらう。

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「読売新聞」

1923（大正12）年11月30日～12月6日号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三十年前の島田沼南

内田魯庵

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>